

 <h1 style="text-align: center;">るうてる</h1> <p style="text-align: center;">箱崎群教会共同体版</p> <p style="text-align: center;">一月報 メッセージと証し</p>	<p>発行 日本福音ルーテル箱崎教会 代表者 牧師 和田 憲明 〒812-0053 福岡市東区箱崎 3-32-3 TEL (092) 641-5440 / FAX (092) 641-5480 箱崎教会・恵泉幼稚園 http://www.jelc.or.jp/hakozaki 聖ペテロ教会・ 奈多愛育園・るうてる愛育園 https://aiikuen.net/</p> <div style="text-align: right;">   </div>
--	---

数えよ、恵み「宣教90年」

日本福音ルーテル箱崎教会と恵泉幼稚園は「宣教90年」をむかえました。コロナ禍ですこし遅れる時期となりましたが、幼稚園ではキリスト教保育連盟前理事長の原和夫先生をお迎えして保護者会や記念講演会を、教会では石居基夫(牧師・ルーテル学院大学学長)をお招きして主日礼拝による説教をいただきました(後述のとおり)。先生のお父様の石居正己(まさみ)師は、1953~55年の間当教会の牧師として任を担われました。

これまで教会と幼稚園は、創立当初より車の両輪のように共に歩みをすすめてきました。遡ること1931(昭和6)年10月、米国の女性宣教師ヘレン・M・シャーク師が糟屋郡箱崎明治町の家屋を借り「箱崎幼稚園」の名前で幼児教育をスタートさせました。翌年1932(昭和7)年5月、山内六郎牧師による第1回の礼拝が執り行われ、箱崎教会の前身「博多教会箱崎伝道所」が開かれます。平日は幼稚園、日曜日の主日は教会として宣教をはじめ今日に至ります。

これからも教会と幼稚園は、出会う方々と共に祝福に満たされる場所であり続けたいと願います。この折、心を寄せてくださったすべての方々へ感謝申し上げます。そして、どんな時代であってもイエスさまの福音を宣べ伝え、さらなる「宣教100年」に向かい、希望を携え祈り求めてまいりましょう。主の平和が共にあるように。



2022年11月27日(日) 箱崎教会「宣教90年感謝礼拝」(待降節第1主日) 説教「今がその時」石居基夫(牧師・ルーテル学院大学学長)

【ヨハネによる福音書 4章21~24節

／新約聖書169ページ】

「イエスは言われた。「婦人よ、わたしを信じなさい。あなたがたが、この山でもエルサレムでもない所で、父を礼拝する時が来る。あなたがたは知らないものを礼拝しているが、わたしたちは知っているものを礼拝している。救いはユダヤ人から来るからだ。しかし、まことの礼拝をする者たちが、霊と真理をもって父を礼拝する時が来る。今がその時である。なぜなら、父はこのように礼拝する者を求めておられるからだ。神は霊である。だから、神を礼拝する者は、霊と真理をもって礼拝しなければならない。」

「まことの礼拝をする者たちが、霊と真理をもって父を礼拝する時が来る。今がその時である」

説教：「今がその時」

①箱崎教会、宣教 90 周年、お祝いを申し上げたいと思います。今回は、福岡地区の 5 教会の集いの計画に大学神学校への依頼をいただき、私がお応えすることになり、合わせて箱崎教会に招いていただいて、この感謝礼拝を共にさせていただいたということで、大変光栄に感じているところです。個人的なことですが、私の父正己は、この箱崎で 1953 年から 55 年の二年間ほど、牧師として務めさせていただきました。母との最初の結婚生活もここで始めたと思います。個人的にもご縁のある箱崎教会なので、この 90 周年を共にできますことを、本当に嬉しく思うことです。

② 今日の聖書の箇所は、待降節の第一主日にも当たるのですが、箱崎教会の宣教 90 年の感謝礼拝ということで、特に選ばせていただいた聖書箇所です。お読みいただいたように、この箇所で、イエスさまはサマリアの女性との対話を通して「真の礼拝」ということを話されています。それは、イエスこそが神と私たちを新たに結び合わせるお方であって、どのような伝統や立派さを誇る神殿でもなく、その主がともにおられるところに、真の神に対する真の礼拝の出来事があることを教えています。主の降誕を待つこの季節に、この聖書の箇所を通して私たちは、イエスが、まさに「真の礼拝」を私たちに与えてくださるために、人としてお生まれになり、わたしたちと共におられる（インマヌエル）というクリスマスの出来事に向け心を整えていきたい。そして、真の礼拝のために私たちのところにいつでも新たにイエスがおいでくださることを覚えたいのです。そして、もう一つ。箱崎教会が 90 年の宣教の歩みを続けてくることができたのは、ただ、このイエスさまご自身が、この地で集う私たちに、飲めば乾くことのないいのちの水を与えてくださってきたからだと思う。確かにこの箱崎教会において、「真の礼拝」が与えられてきたのだということを知りたい。そう思うのです。

③ さて、イエス様一行が、エルサレムからガリラヤへ帰っていかれる途中、サマリアを通られた時のこと。喉に渇きを覚えたイエスさまは、水場に行き、たまたま水を組みきた一人の女性に水をいっぱい汲んでほしいと頼んだというところからこの出来事は始まり

まっています。当時、ユダヤとサマリアは隣同士、元々は同じモーセに導かれてきた民族、同じ神への信仰を持っていましたが、歴史的経緯があって当時大変仲が悪かった。敵対する関係にありました。ユダヤの人々は、サマリアが他民族の支配を受ける過程で民族的にも宗教的にも純粋さを失ったと考え、自分達のエルサレムとは違う聖地ゲリジム山で礼拝をするサマリア人が偶像礼拝をおこなっていると嫌っていました。ですから、ユダヤ人であるイエスからサマリアの女性に声をかけるということ自体、普通はあり得ないようなことです。しかし、イエスさまはむしろごく自然に、この女性に話しかけ、水を求めながら、ご自身がお与えになる永遠のいのちの水について話されました。そして、いずれ、あなたたちも「真の礼拝」をするときに来ると、そうおっしゃられ「今がその時である」と言われた。繰り返すようですが、ユダヤ人で、教師と呼ばれるような立場のイエスが、サマリア人、しかも女性に語りかけ、礼拝について教えられるということは、当時の常識から考えると起こり得ないようなことです。けれども、この世界にある敵対と差別の壁を超えるイエスの姿そのものの中に、実は神の恵の自由さと真実が示されているとあって良いでしょう。だからこそ、その恵の今が、「真の礼拝」の出来事だと、おっしゃられているのだと思う。

④ このイエスさまとサマリアの女性の間のこの出来事、思いますとそもそも大変珍しいことが起こっていることに気づきます。4つの福音書には、ガリラヤから始まり、エルサレムに行かれ、また実際にさまざまな地方にも出かけられたイエスさまの宣教の旅が示されている訳ですが、おおよそ、そこに描かれている出来事は、人々が主に癒しを求め、教えを乞う、憐れみを求めてくるということがほとんどです。あるいはイエスさまが自らその人のところに近づいて、癒し、悪霊を追い出したりして、神の恵の力が示されていく。ところが、この箇所は、イエスさまの方が、喉が渇いたとあって、水を汲んでほしいと求めていらっしゃる。イエスご自身が、一人の人として渇きを訴え、水を求める。「今がその時」と言われた真の礼拝は、実は、この主の求めに始まっている。わたしたちが、癒しや助けを求める、その私たちの求めにはじまっているのではない。イエスが求めておられる。その主の渇

きに、真の礼拝が結び付けられている。私たちには、意外にも思うことです。この主の求めに、マタイの25章に記された一つのたとえが思い出されました。そこで王は、人々を右と左に分けて、右の人にこう言うのです。「さあ、わたしの父に祝福された人たち、天地創造の時からお前たちのために用意されている国を受け継ぎなさい。お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが渇いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからだ。」左の人たちには、永遠の火に投げ込まれるようにと言うのです。それは、お前たちは飲ませてくれなかったからだという。右の人も左の人たちも、したこと、しなかったこと、それぞれ身に覚えのないことでしたから、尋ねると、王は言うのです。「この小さいものの一人にしたのは、すなわち私にしてくれたこと、しなかったのは、私にしてくれなかったことだ」と。主が、私たちに求めておられるのは、この小さいものの一人として求められている。真の礼拝を覚える、私たちは、今、何を主に求められているのか。その声を聞いているのか、考えさせられるのです。

⑤ この箱崎教会の始まり。90周年を迎えたのですから、今から90年前。1930年代の初めでした。日本福音ルーテル教会は佐賀の地で宣教を始め、それこそ30年を重ねてきて、その間に熊本に宣教の中心を据えて神学校をはじめ、九州学院、女学院、慈愛園と教育や福祉の働きを展開してきたところでした。久留米、から福岡博多にも1900年代の初めに福音伝道を広げてきました。実際1930年代は日本伝道の40周年から50年に向かうということで、全国に向けて宣教を展開していく、確かその十年間に百の伝道所、30のそんな時代でした。博多教会が25、6年と確かな歩みを重ねながら、幼稚園、また日曜学校と子どもたちや、またその母親や家庭を支えていく働きを通して宣教を展開していました。当時、昭和の初期、都市として多く人口が集中してくる北九州、福岡博多では、幼稚園、その分園と日曜学校の取り組みがなされてきて、大きな飛躍が見られるときです。そして、この箱崎にすでに分園があったところに本格的な幼稚園をたて、そこで伝道所としてスタートしていくのが、箱崎教会の起こりと伺っています。そこには特にシャーク園長

はじめ日本にこられていた女性宣教師たち、またアメリカの本国で支援する婦人会の祈りと提案、そして日本でもすでに全国組織として連盟を生み出していた婦人たちの具体的な働きがあって実現していきました。急速に変わっていく社会の中で十分な教育的なケアが行き届かないままになっていた子どもたちや母親の求めに応えるところに使命を見出していたことだと思う。ルーテル教会がすでにそうした幼稚園を作ってきた実績もあって、この働きを持って、福岡のそれぞれの地に主の福音をもたらす、大きな希望が広がっていったと思う。簡単なことではありません。確かにお金もそうですけど、働きを作っていく協力が得られなければできないことではありません。先達たちの働きは、この場所で、主の求める声を聞いて、いっぱい水を汲み、差し出すようにして、この地での主と人々の交わりが始まる。そして、真の礼拝が起こっていく。この箱崎の幼稚園が、恵の泉、恵泉と呼ばれたのは、決して偶然のことではなく、確かにイエスさまがここで一人の女性に話しかけられ、求められたということが刻まれているように思うのです。

⑥ 教会はその時々主によって求められ、集められ、共に主の声をきき、生かされて、それぞれの務めを行きながら、「真の礼拝」にあずかっていくのです。しかし、この地上のすべてのものがそうであるように、見える形でいつまでも同じようにそこにあるわけではありません。使命を得て、大きくなっていくときもあれば、また、その使命を終えていくときもあるでしょう。ゆるされて、求められて、生き続けるのであれば、何が主の求めなのか、その渇き、その空腹、その病や痛みを聞きながら、私たちは主の愛に応えるように招かれていくのでしょうか。今の時代、争いや分断が広がっている。乗り越えられないように見える人々の憎しみや悲しみが立ちはだかるようにも思えるでしょう。でも、イエスさまは、そうしたところを超えて、語りかけ、求められていくお方でした。だからこそ、こんなにも主から遠い私にも、主の招きが聞こえてきたのです。だからこそ、こうして生かされてきたのです。だからこそ、今日の務めが与えられている。神の恵の力が、ここにある。真の礼拝が与えられる。「今が、そのとき」なのです。主の声に、その言葉に、生かされていきたい。そう思うのです。

「夫の召天」

M・F

私の夫は、今年7月1日天に召されました。その時から3ヶ月(約100日)は、私にとって大きな試練でした。でも神様は試練と共に、恵みも与えてくださるということを5ヶ月たった今、はっきりと理解することができます。その3ヶ月のことを、私なりに証しとして書いてみました。読んでいただければ幸いです。

夫は一年半程前から、難病指定の間質性肺炎で、酸素吸入の治療を受けていました。病人ですから、そう食欲もなく、若い頃は肥満体でしたが、肺炎になってからはやせて、ベルトの穴を細めずにずらしていくような日々でした。

しかし、研究の仕事もしながら、夜は必ず350mlのビールをおいしそうに飲む日々で、そんなに早く別れの日がこようとは思っていませんでした。

6月19日父の日、忘れもしません。うずくまっていた突然に意識を失いました。肺に穴が開く気胸という病気でした。救急車で浜の町病院に運ばれたのですが、日曜日でしたが幸いなことに、当直の先生が呼吸器外科の先生で応急処置がよく運良く意識が戻りました。しかし日に日に病状は悪化、入院して二週間先生方や看護師さんの懸命の治療も空しく、7月1日午後3時19分天に召されていきました。7月3日家族親族葬で見送りました。教会からも牧師先生、H・MさんHさんが列席してくださいました。

夫婦の別れはつらいものでした。お掃除やお風呂はヘルパーさんがきてくださいますが、食べることが一番つらかったです。食べなければと、頭ではわかっているのですが、食べる意欲、そして作る意欲がわかないのです。

考えてみますと、今まで誰かのために食事を作る以外のことは経験がないのです。つまり、自分一人のために食事を作る経験がないのです。食事は誰かのために作ることにしか経験してなくてその落差にとまどい悩みました。御弁当をとったりしましたが同じでした。

他の人からは自分の食べたいものを食べてといわれましたが、何を食べたいのかわからないのです。私も心臓の病気で、去年11月と今年2月、二回手術入院し、あまり食べないものですから35kgまで体重が減

りました。

精神的にも夫がいなくなったことはこたえました。悲しさ、寂しさ、空しさ、祈っても祈っても満たされません。神様が与えてくださった試練、大切なものとは思いましたが、人の心配がないことにはつらいことでした。子供や孫達も私を案じて来てくれますがコロナの最盛期。ゆっくり話すことも一緒にご飯を食べることもままならず、近くにいる二人の子供のそれぞれの家族にコロナ患者が出た時は、出入りはヘルパーさんだけで、寂しくて泣きそうでした。

猛暑もありました。熱中症に気をつけていましたが毎日寝る前には微熱がでました。

先日、ラインをしている一人の孫が「元気の出る言葉を教えて」といつか来た時に、マタイ五章の「あなたがたは地の塩であり、世の光である」を教えました。神様はそんなにも私達を大切に愛してくださっているのだから私達も元気を出して地の塩、世の光になるようにしよう、と孫に書いていてハッとしたのです。それは私自身にも言えることではないか。神様の愛に応えるために私自身にも言えることではないか。神様の愛に応えるために私自身を大切に、元気にしていなければいけないのではないかと気づかされたのです。いつまでも寂寥感(せきりょうかん)、喪失感にひたつていず、前向きにポジティブに生きていなさい、と言われていたようでした。夫の死から百日たつてようやく一つの区切りがきたのかもかもしれません。遺影の夫は相変わらず微笑んで何も言いませんが本人はどんなにつらく残念だったことでしょうか。私はイエス様が「地の塩、世の光」といわれるようになるために精一杯食べ生きていこうと思います。

私のためにお手紙やお電話をくださった方、祈ってくださった方に心より感謝とお礼を申し上げます。

【おしらせ】

- 毎週の礼拝は、いつでも(一度だけでも)、どなたでも(信徒でなくとも)自由にご参加できます
- 子どもたちには、教会学校のように「こどもへのおはなし」があり、「祝福」をいたします
- 礼拝堂の見える隣の部屋を安心して自由にご使用できます(エアコン・音響完備)
- ご不明な点は、牧師まで気軽におたずねください



